山口県立山口博物館所蔵幕末維新関係資料ガイド

山　田　　稔

Yamaguchi Prefectural Museum Collection of Bakumatsu Ishin related Document Guide

Minoru Yamada

山口県立山口博物館研究報告

第43号（2017年３月）別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.43（March 2017）

山口県立山口博物館研究報告　第43号　33～74頁　2017年3月

山口県立山口博物館所蔵幕末維新関係資料ガイド

山田　　稔[1)]

Yamaguchi Prefectural Museum Collection of Bakumatsu Ishin related Document Guide

Minoru YAMADA

緒　言

本稿は、明治150年（平成30年）を機に、山口県立山口博物館所蔵の幕末維新関係資料ガイドを企図して執筆したものである。

主な館蔵資料群の紹介に加えて、展示や出版物掲載等で利用頻度が高い資料40点を選び、図版と解説を付した。紙幅の関係上、掲載資料は限られているが、長州藩幕末維新史研究に資することを願うものである。

1　館蔵幕末維新関係資料の内容

当館は、前身となる防長教育博物館（明治45年（1912）4月創設）以来、山口県関係の歴史資料の収集・展示に取り組んできた。

幕末維新を中心とした資料の収集･展示に力が注がれるようになった契機は､大正6年（1917）4月、山口県立教育博物館の建設である。同館には、「維新記念室」（煉瓦造、平屋建、現存）が設置され、県内各所からの寄託や出品資料によって、当時としては充実した維新関係の展示空間となっていた。また、文献資料収集強化のため、大正9年（1920）、渡辺世祐、横山健堂、妻木忠太の専門家3名を教育博物館委員に委嘱し、文部省維新史料編集局や毛利家編輯所などで史料謄写を行った。これらの成果は『防長史料』第1～23集として刊行されている。

さらに、昭和3年（1926）12月、「防長先賢堂」（RC造、平屋建、現存）の設置により、防長精神教育が推進され、維新資料の活用に拍車がかかることとなった。ちなみに、教育博物館時代には、模写による資料収集も積極的に行われている。幕末維新関係では、「河上弥市肖像」（図版№30）が、その例である。

昭和42年（1967）10月、明治維新100年を記念した新館（現館）の建設後も、木戸家・周布家からまとまった資料の寄贈を受けるなど、収蔵資料の充実化が進んだ。また、昭和51年（1976）5月、山口県文書館から維新関係を含む書画類508点が保管転換された影響も大きく、現在、約2,100点の幕末維新関係資料を収蔵するに至っている。これら明治開館以来の資料収集・展示活動の内容は、『山口県立山口博物館100年のあゆみ』（山口県立山口博物館、2012）を参照され

1）山口県立山口博物館（歴史）

たい。館蔵の主な幕末維新関係資料群の内容は、以下のとおりである。

◎毛利家寄贈資料

昭和27年(1952)11月26日付けで、毛利家当主・毛利元道氏から寄贈された、毛利輝元・秀就・吉元の装束類、毛利敬親・元徳に係る肖像画・衣装・調度品類など毛利家伝来資料80点である(同31年８月・１点、同35年９月・９点追加で計90点)。

この寄贈の背景には、当館が展示資料の補強に迫られていたという事情があった。かねてより、展示資料の多くを寄託や出品資料で賄っていたため、戦争末期の資料疎開や寄託資料の返却、戦後数年間の歴史系資料の展示停止による影響が大きく、展示に支障を来していたのである。この寄贈によって、館蔵資料が大きく充実したことは言うまでもない。

本資料群には、原田直次郎筆「毛利敬親肖像」(図版№３)、イタリアの銅版画家Ｅ.キヨッソーネ筆「毛利敬親肖像」(同№4)、同「毛利元徳肖像」(同６)など、美術品としての価値が高い資料も多数含まれている。ちなみに、国指定重要文化財「正徳元年朝鮮通信使進物並進物目録」(平成５年６月10日付け指定)も、本資料群に属するものである。

◎木戸孝允関係資料

昭和56年(1981)２月、木戸孝彦氏(木戸孝允曾孫)から寄贈された81件186点の資料。

木戸家伝来の、肖像・漢詩書・書簡・写真・刀剣・調度品類のほか、吉田松陰・毛利敬親・毛利元徳・伊藤博文・杉孫七郎・楫取素彦・長三洲・山田顕義・井上馨・山県有朋・前原一誠・山尾庸三・宮部鼎蔵・木戸松子・岩倉具視・大久保利通ほか関係人物の絵画、書簡、写真等が多数含まれている。

肖像画は３点で、なかでも「木戸孝允肖像」(図版№17)は、洋装姿の肖像画として広く知られている。詩書類も豊富だが、いずれも木戸真筆の落款・印章を確認する上で基準となる資料である。

調度品類では、愛用の硯・硯箱(図版№20)、携帯用硯箱のほか、刀剣類も含まれている。写真の大半は鶏卵紙で、コンディションの比較的良いものが揃っている。自身の写真も多いが、伊藤(図版№34参考)、井上(同前)、山県(図版№35)、山田(同№37)などの長州関係者をはじめ、木戸夫人・松子の写真も複数含まれている。

文書類は８点と少ないが、明治元年(1868)10月15日付け「木戸孝允書簡　野村素介宛」(図版№24)は、木戸の国家構想を示すものとして注目される。なお、これらの資料目録は、『維新の英傑 木戸孝允』(山口県教育委員会、1981)を参照されたい。

◎周布政之助関係資料

昭和54年(1979)８月、周布公兼氏(周布政之助曾孫)から寄贈された1,564件2,331点の資料である。このうち、政之助の書画・調度品類474件606点が当館へ、文書類1,090件1,725点が山口県文書館へ、分割収蔵されている。同時に、書画類13件15点が萩市(萩博物館所蔵)、同13件14点が三隅町(現長門市、村田清風記念館所蔵)へ寄贈されている。資料目録は、『周布政之助資料図録』(山口県教育委員会、1979)を参照されたい。

当館所蔵資料の内容は、政之助が揮毫した多数の漢詩や、本人着用の陣羽織・袴１領(図版№29)・鎧下着・烏帽子形兜などの衣装類、愛用の「ガラス杯」(図版№27)・「萩焼河豚型徳利」(図版№28)・各種陶磁器などの調度品で、政之助の人物を偲ぶのに好適な資料が揃っている。

この他に、平成28年(2016)４月、周布兼定氏(周布政之助玄孫)から寄託された26件36点があ

る。本件には、文久２年(1862)、政之助が長州藩医長野昌英と京都屋敷で撮影した写真(ガラス、アンブロタイプ)など３枚が含まれている。なお、これらのうち16点は、コーナー展「初公開！周布政之助資料」(平成29年１月24日～３月26日)で一般公開した。

◎杉孫七郎関係資料

平成25年(2013)6月28日付けで、杉徳和氏(杉孫七郎曾孫)から寄贈された780点の資料。杉孫七郎(1835-1920)は、長州藩士植木五郎右衛門の子として生まれ、のち杉家を継いだ。藩主毛利敬親の小姓となり、幕府の文久遣欧使節に随行。維新後は、宮内大丞、宮内少輔、宮内大輔、皇太后宮大夫、枢密顧問官などを歴任。明治20年(1887)年、子爵に叙せられた。諱は重華、松城・聴雨と号し、能書家としても知られる。

内容は、漢詩屏風・扁額・軸物・書簡・辞令・通知類、杉家伝来の古文書類である。このうち、書簡は、伊藤博文から杉孫七郎宛が31点と最も多く、このほか山県有朋・有栖川宮熾仁親王など明治政府の要職からのものも含まれる。辞令・通知類は一式揃っており、明治以降の孫七郎の履歴を辿るに十分である。資料目録は、伊原・佐藤　「杉家寄贈資料について」(『山口県立山口博物館研究報告』第40号、2014)を参照。

このほか、維新関係ではないが、特筆すべきものに、大内氏歴代の発給文書の手鏡「多々良之麻佐古」　１帖がある。同資料の釈文は、『山口市史　史料編　中世』(山口市、2016)、『「戦国時代展」図録』(釈文・翻刻、384～400頁、読売新聞社、2016)を参照されたい。

◎福本コレクション

昭和40年(1965)4月30日付けで購入した、萩市出身で、神戸商工会議所理事を勤めた福本義亮氏(1890-1962)が蒐集した防長維新関係者の書幅73点である。

福本氏は、吉田松陰・久坂玄瑞の研究家として知られ、『吉田松陰之殉国教育』(誠文堂、1933)、『松陰先生交友録』(惜春山荘、1928)、『訓註吉田松陰殉国詩歌集』(誠文堂新光社、1937)、『踏海志士金子重之助』(金子敏輔、1958)、『松下村塾の偉人　久坂玄瑞』(誠文堂、1934)など松陰関係の研究書を多数刊行している。福本氏の人物は、田中助一　「福本義亮さんをしのぶ」(『久坂玄瑞全集』収録、マツノ書店、1978)に詳しい。同稿によれば、福本氏の没後、本や遺墨はほとんど古書店に買い取られ、その一部を当館や田中氏が買い戻したものの、大部分が散逸してしまったという。

本コレクションの関係人物は、吉田松陰・久坂玄瑞・高杉晋作・品川弥二郎・前原一誠・松浦松洞・楫取素彦・周布政之助・清水清太郎・東久世通禧・山田顕義・来原良蔵・土屋矢之助・入江九一・久保清太郎・玉木文之進・真木和泉・青木周弼・青木研蔵・毛利登人・堀真五郎・杉孫七郎・山田亦介・宍戸備後助・中谷正亮・野村素介・木戸孝允・寺島忠三郎・内藤万理助・御堀耕助ほか多彩で、館蔵コレクションの中で最も対象が広い。

久坂玄瑞「七卿落今様歌」(図版№15)、「一燈銭申合」(文久元年12月、同№16)は、本コレクションに含まれている。

◎吉田コレクション

山口中学教諭で郷土史家の吉田祥朔氏(樟堂、1877-1967)が蒐集した、防長関係者の軸物類107点である。昭和52年(1977)5月20日付けで、吉田千與氏(祥朔氏四男篤氏夫人)から寄贈された。

吉田氏は、『村田清風全集』　上・下(山口県教育会、1985)、『増補近世防長人名辞典』(マツノ書店、1976)などの著者として知られる。吉田氏の研究資料・図書類は、「吉田樟堂文庫」(2,746点、山口県文書館蔵)として広く一般に公開されている。

本コレクションは、近世から近代における、防長ゆかりの藩士・学者・文人・画家らの詩書・絵画が大半を占めている。幕末維新関係では、村田清風・杉孫七郎・林百非・長三洲・月性・周布政之助・坪井九右衛門の詩幅がある。「村田清風詩書」(嘉永5年晩冬、図版№7)は、その代表である。

◎熊澤コレクション

平成28年2月１日付けで、熊澤喜章氏(明治大学商学部教授)から寄贈された吉田松陰・佐久間象山資料６件７点である。これらは、すべて喜章氏の父・善三郎氏(1926-2002)のコレクションである。善三郎氏は、会社経営の傍ら、佐久間象山・吉田松陰の研究に打ち込まれ、卓越した鑑定眼で資料蒐集に当たられた。寄贈は、将来然るべき場所・機関等へ納めるように、という善三郎氏の生前の意思に喜章氏が従われたものである。

全６件７点のうち、５件５点が松陰直筆、１件２点が佐久間象山直筆である。特筆すべきは、「吉田松陰自賛肖像(中谷本)」(図版№13)であろう。吉田松陰自賛肖像は、安政６年(1859)５月、江戸護送の幕命を受けた松陰が、旅立ち前に、吉田家・杉家と門下生の品川弥二郎・久坂玄瑞・岡部富太郎・中谷正亮の4名に、形見として与えたもので、６幅からなる。本図は、このうち、中谷正亮(1831-62)に与えた1幅で、安政６年５月24日に作成された最後の作品である。

このほか、『吉田松陰全集』未収録の安政２年(1855)３月８日付け「吉田松陰書簡　杉梅太郎宛」(図版№８)、安政６年(1859)５月24日付け「吉田松陰詩書　贈福川犀之助」(図版№12)など、いずれも松陰の事績をたどる上で貴重な資料である。

なお、本コレクションの詳細は、山田・荒巻「新収「吉田松陰文書」について」(『山口県立山口博物館研究報告』第42号、2016)を参照のこと。

◎その他の資料群

錦絵・版画類は、質量ともに豊富である。単独のコレクションではないが、幕末維新期の歴史事件から人物伝、明治近代化に係る218点を所蔵している。「四境戦争図」(図版№32)、「毛理嶋山官軍大勝利之図」(同№39)、「明治小吏年間紀事 宇龍港ニテ賊魁捕縛之図」(同№40)は代表例である。資料群の内容は、村井「版画に見る山口県(Ⅰ)－その解説と考察－」、「同(Ⅱ)」(『山口県立山口博物館研究報告』第7号、1981・同８号、1982)を参照されたい。

このほか、明治期の歴史資料として注目されるものに「近藤清石(きよし)資料」がある。明治～大正期にかけて活躍した歴史家・近藤清石(1833-1916)の文書、写真、工芸品など186点である。平成４年(1992)11月25日付けで、子孫の近藤喜代子氏から寄贈を受けている。この後、平成15年(2003)5月21日付けで、清石の縁戚にあたる町田傑氏から清石の絵画作品など69点が寄贈され、館蔵の清石関係資料はまとまりを見せている。

近藤は、『大内氏実録』(1885初刊、マツノ書店復刻、1995)、『山口県風土誌』(1904初刊、歴史図書社復刻、1972)のほか、大内氏や毛利氏、防長郷土誌に関する著作も多く、その研究資料・図書類は、「近藤清石文庫」(2,746点、山口県文書館蔵)として広く一般に公開されている。

また、近藤の注目すべき功績に、明治中期から大正初期における大内塗復興がある。復興当初の大内塗の椀、盆(明治21年１月、岩本梅之進作)などの遺品は、当時の大内塗の品質を示す作品として貴重である。これら近藤の事績は、テーマ展(平成４年２月25日～４月５日)図録『山口県地方史研究の先駆者 近藤清石』(山口県立山口博物館、1992)を参照されたい。

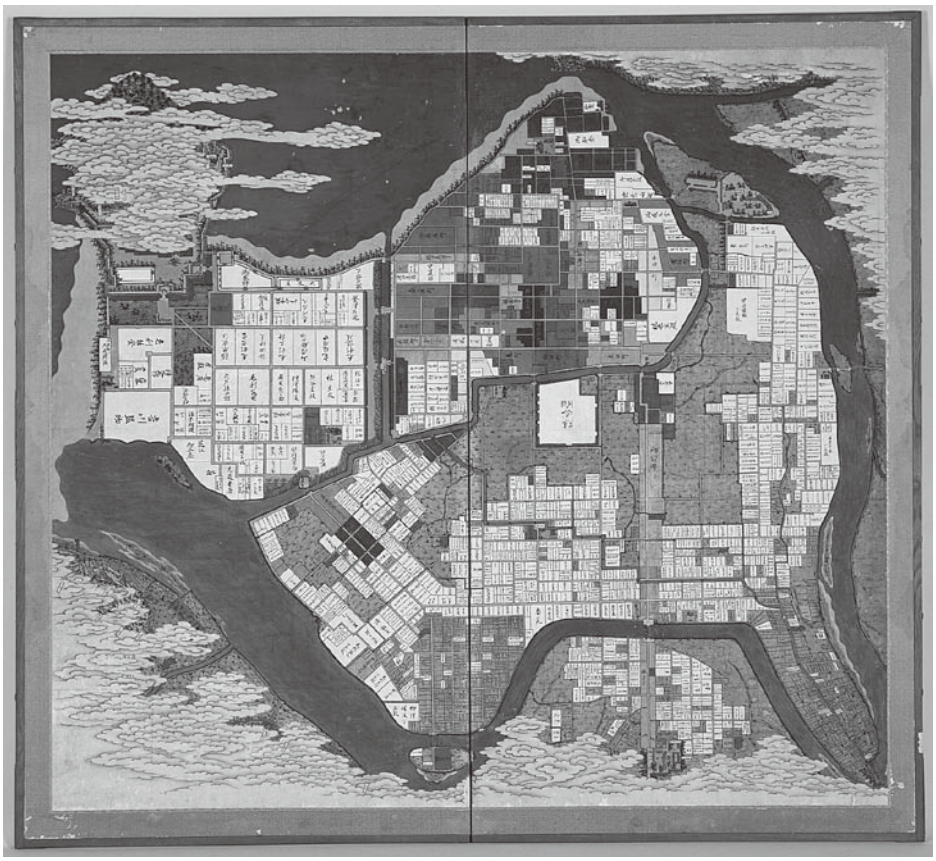
2　図版編

目　次

№.	資料名	制作者	年代
1	萩御城下絵図		
2	毛利公御代々御画像	雲谷等起	
3	毛利敬親肖像	原田直次郎	明治23年(1890)
4	毛利敬親肖像	E.キヨッソーネ	
5	毛利敬親書「格非心」	毛利敬親	
6	毛利元徳肖像	E.キヨッソーネ	
7	村田清風詩書	村田清風	嘉永5年(1852)晩冬
8	吉田松陰書簡　杉梅太郎宛	吉田松陰	安政2年(1855)3月8日
9	随園詩話補遺 巻三	吉田松陰	安政4年(1859)11月5日
10	吉田松陰書簡　月性宛	吉田松陰	安政5年(1858)1月11日
11	吉田松陰書簡	吉田松陰	安政5年(1858)8月19日
12	吉田松陰詩書　贈福川犀之助	吉田松陰	安政6年(1859)5月24日
13	吉田松陰自賛肖像(中谷本)	吉田松陰、松浦松洞	安政6年(1859)5月24日
14	久坂玄瑞肖像		
15	七卿落今様歌	久坂玄瑞	文久3年(1863)
16	一燈銭申合	久坂玄瑞	文久元年(1861)12月
17	木戸孝允肖像		
18	木戸孝允写真		明治2年(1869)4月
19	木戸孝允写真		明治5年(1869)閏2月8日
20	硯・硯箱		
21	木戸孝允扇面和歌	木戸孝允	文久年間(1861－64)
22	木戸孝允戯画	木戸孝允	文久2年－元治元年(1862-64)頃
23	木戸孝允詩書	木戸孝允	慶応2年(1866)
24	木戸孝允書簡　野村素介宛	木戸孝允	明治元年(1868)10月15日
25	日本名女咄　幾松木戸公を救うの図	楊洲周延	
26	周布政之助詩書	周布政之助	文久元年(1861)4月
27	ガラス杯		
28	萩焼河豚型徳利		
29	陣羽織・袴		
30	河上弥市肖像	赤沢松琴	昭和10(1935)
31	来島又兵衛肖像	金戴	元治元年(1864)冬
32	四境戦争図		慶応2年(1866)
33	山口御屋形図		元治元年(1864)頃
34	日本政記	頼山陽	弘化2年(1845)
35	山県有朋写真	内田九一	慶応3年(1867)5月18日
36	山尾庸三写真	丸木利陽	
37	山田顕義写真	上野彦馬	明治2年(1869)
38	広沢真臣写真	内田九一	
39	毛理嶋山官軍大勝利之図	照皇斎国広	
40	明治小吏年間紀事 宇龍港ニテ賊魁捕縛之図	月岡芳年	明治9年(1876)11月22日

凡　例

一、記載項目は、資料名/筆者・制作者/制作年代/品質・形状/員数/法量/整理番号/解説、の順である。
一、法量は、原則として本紙・本体のもので、単位は、センチメートルである。
一、人名は、時期による名乗りの違いや変名などがあるが、記述の煩雑を避け、一般に通用しているものを使用した。
一、掲載資料のうち、2015年NHK大河ドラマ特別展「花燃ゆ」出品資料の解説は、同展図録（NHK、NHKプロモーション、2015）に拠った。



1　萩御城下絵図

嘉永２年以降、幕末期
紙本着色
２曲１隻
157.5×173.0　　540-28

長州藩の城下町萩は、阿武川の分流、松本川と橋本川に囲まれた三角州上に位置する。

図の左上に城地の指月山（しづきやま）が、中央に嘉永２年(1849)に拡張移転した藩校明倫館が見える。右上には、安政２年(1855)４月に開通した姥倉（うばくら）運河が描かれている。田畠や社寺地、屋敷地などが色分けされ、藩士の居住地も氏名が細かに記されるなど、幕末期の萩城下の様子がよくうかがえる。

2　毛利公御代々御画像

雲谷等起
江戸時代　19世紀
紙本着色
1幅
123.0×56.5　　226-17

藩祖毛利元就から幕末の敬親まで、毛利家歴代の肖像画。

藩祖毛利元就を筆頭に、長男隆元、孫輝元、初代藩主秀就から13代敬親までの16名を束帯姿で描く。筆者は、長州藩御用絵師・雲谷等起（1836-？）。

長州藩にとって、天保7年（1836）年は、10代斉熙、11代斉元、12代斉広の藩主3人が相次いで亡くなる多難の年であった。その翌年、敬親が家督を継ぐことになる。

3　毛利敬親肖像

原田直次郎
明治23年（1890）
油彩　カンバス
1面
92.0×65.0　　910-55

毛利敬親（1819-71）は、長州藩13代藩主。幼名猷（みち）之進。名は慶親、のちに敬親と改めた。諡（おくりな）から忠正（ちゅうせい）公と称される。天保8年（1837）4月家督を継ぎ、激動期の藩政を担った。

明治2年（1869）1月、薩摩・土佐・肥前の藩主と共に版籍奉還を上表し、家督を世子元徳（もとのり）に譲って隠居。明治4年（1871）3月、山口で死去。墓は、山口香山（こうざん）墓所（国史跡「旧萩藩主毛利家墓所」）。

本像は、慶応2年（1866）12月、三田尻停泊中の英国艦上で撮影した写真をモデルに描いたもの。なお、本像には、原田の下絵（図版右上）も存在する。両図ともに毛利家伝来品。

4　毛利敬親肖像

E.キヨッソーネ
明治時代　19世紀
コンテ　紙
1面
69.3×53.7　　910-56

作者は、明治天皇や西郷隆盛の肖像画で知られるイタリアの銅版画家E.キヨッソーネ(1833-98)。毛利家伝来品。

5　毛利敬親書「格非心」

幕末期
紙本墨書
1幅
110.0×52.3　212-128

長州藩の家老浦靱負（元襄、1795-1870）が、藩主毛利敬親から賜って秘蔵していた書幅。「格非心」は、『孟子』の「唯だ大人（徳の高い立派な人）のみ能く君心の非を格すを為す」に拠っている。

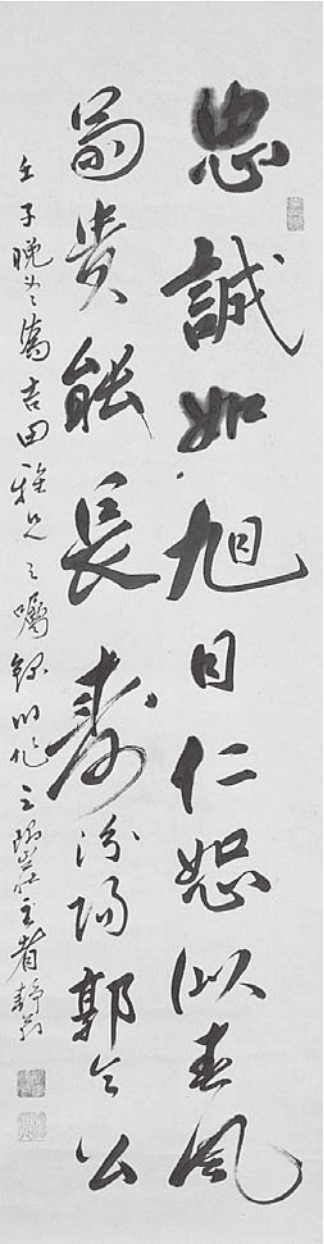
敬親は、家臣の意見を聞くことに努めたが、本書は、自身の姿勢に非があれば批判してくれるように、もしくは家臣に自分を批判できるよう成長して欲しいとの意を示したものであろう。毛利家伝来品。

6　毛利元徳肖像

E.キヨッソーネ
明治時代　19世紀
コンテ　紙
1面
74.0×59.0　　910-53

毛利元徳（広封、定広、1839-96）は、支藩の徳山藩毛利広鎮の10男。安政元年（1854）、毛利敬親の世子となった。諡から忠愛公と称される。明治2年（1869）家督相続後は、山口藩知事、貴族院議員を務めた。墓は、山口市の香山墓所（国史跡「萩藩主毛利家墓所」）。

作者は、イタリアの銅版画家E.キヨッソーネ（1833-98）。毛利家伝来品。



（印）
忠誠如旭日　仁恕似春風
冨貴能長寿　汾陽郭令公
壬子晩冬為吉田雅兄之嘱録旧作三隅山荘主者静翁（印）（印）

村田清風肖像（部分、226-20）

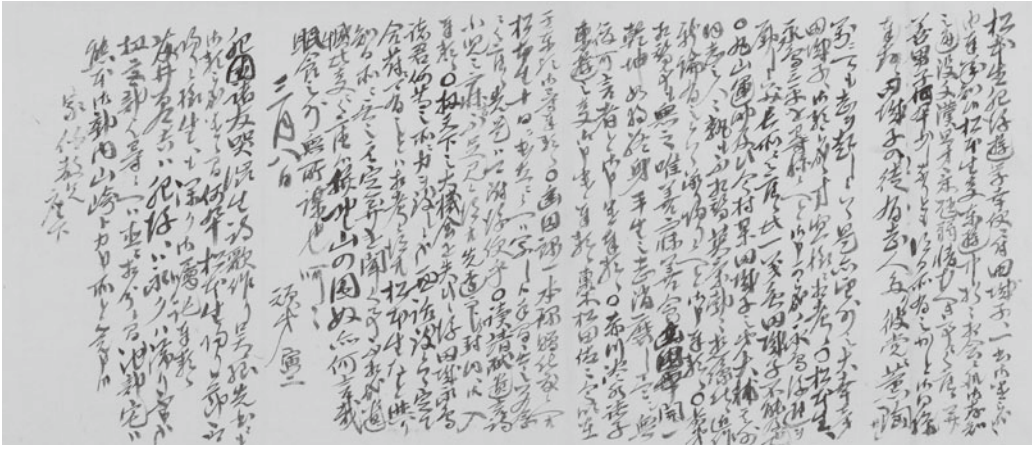
7　村田清風詩書

嘉永５年（1852）晩冬
紙本墨書
1幅
107.8×29.1　　吉田１

長州藩の藩政指導者村田清風（1783－1855）と吉田松陰の交流を示す書幅である。

弘化２年（1845）、16歳の松陰は、職を辞して故郷の三隅山荘に帰住した63歳の清風を初めて訪ね、諸国遊歴を勧められるなど、清風が松陰に与えた影響は大きかった。

本書は、嘉永５年（1852）晩冬に、松陰の依頼で旧作の詩（「山荘叢書清風詩集」、『村田清風全集』 下巻所収、山口県教育会、1963）を揮毫したもの。

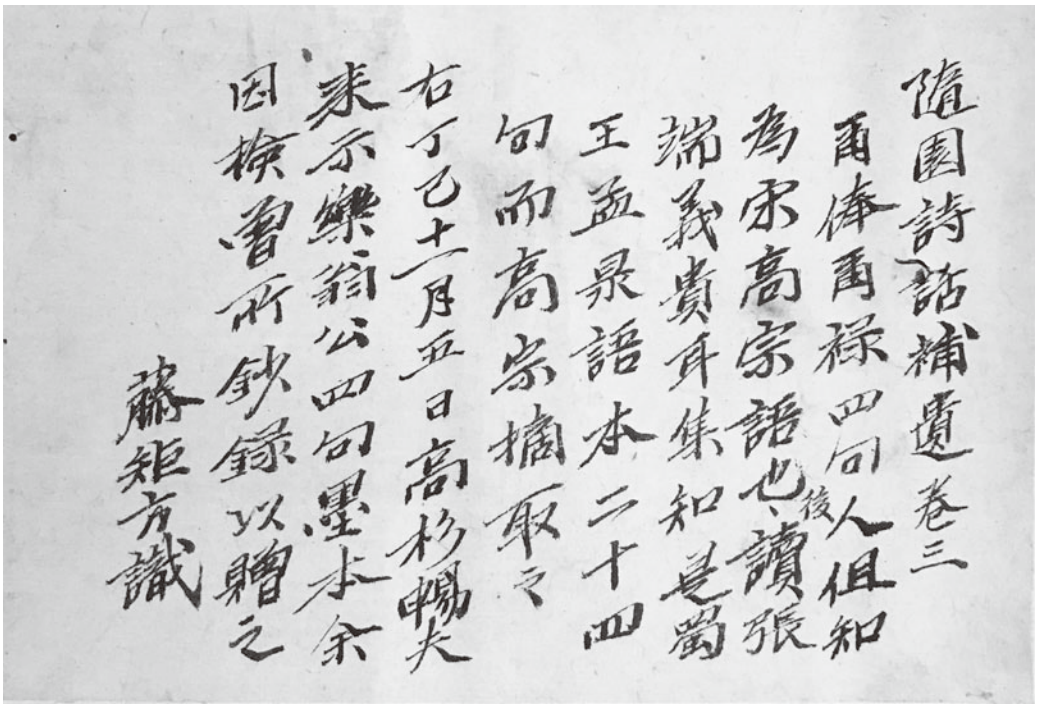


8　吉田松陰書簡　杉梅太郎宛

安政２年(1855)３月８日
紙本墨書
１幅
13.5×54.0　　熊澤１
(松陰在野山獄、杉在萩)(『全集』 未収録／参考・「松本源四郎に與ふ」(『全集』(定本版)第５巻329頁／(大衆版)第７巻361頁所収)

長州藩天文暦数師範・松本源四郎の熊本遊学に関連した内容で、松本の熊本行に際して、幸便として宮部鼎蔵(みやべていぞう)へ書簡を送ったことや、獄中の松陰の様子と心情が記されている。

松陰は、松本に文才が無く、体力・気力も弱々しいが、人物は善いゆえ、修業先で何か少しでも得るものがあることを願った。このことは、松陰の言う「人賢愚ありと雖も、各々一、二の才能なきはなし、湊合して大成する時は必ず全備する所あらん。是れ亦年来人を閲して実験する所なり。人物を棄遺せざるの要術、是れより外復たあることなし」(「福堂策 上」)に通じている。


隨園詩話補遺卷三
爾俸爾祿四句人但知
為宋高宗語也後讀張
端義貴耳集知是蜀
王孟昶語本二十四
句而高宗摘取之
右丁巳十一月五日高杉暢夫
來示樂翁公四句墨本余
因檢曾所鈔錄以贈之
藤矩方識

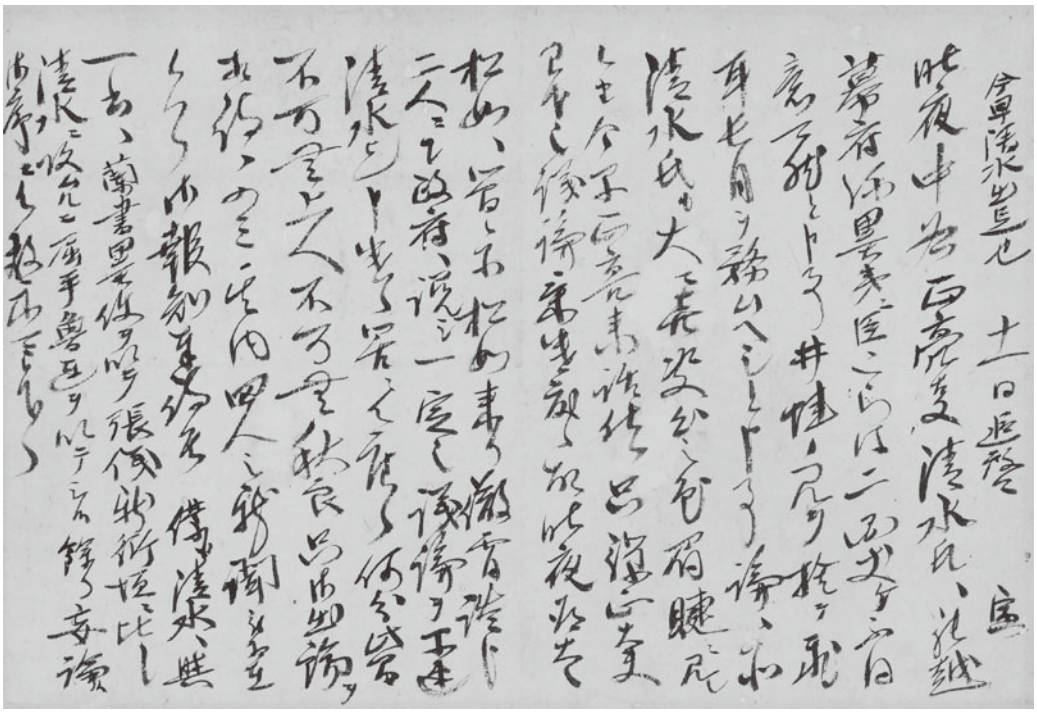
9　随園詩話補遺 巻三

吉田松陰
安政4年(1857)11月5日
紙本墨書
1巻
14.0×20.6　　木戸37

安政4年(1857)11月5日、松陰が高杉晋作に書き与えたもの。同日は、杉家の宅地内にある小舎を補修し、まさしく「松下村塾」が開塾した日であった。

『随園詩話補遺』は、清の文人・袁枚(号、随園)の著作。

本書は、巻子装に仕立てられ、松陰と交流のあった讃岐国(香川県)の志士日柳燕石(くさなぎえんせき)が序を記している。木戸家伝来品。



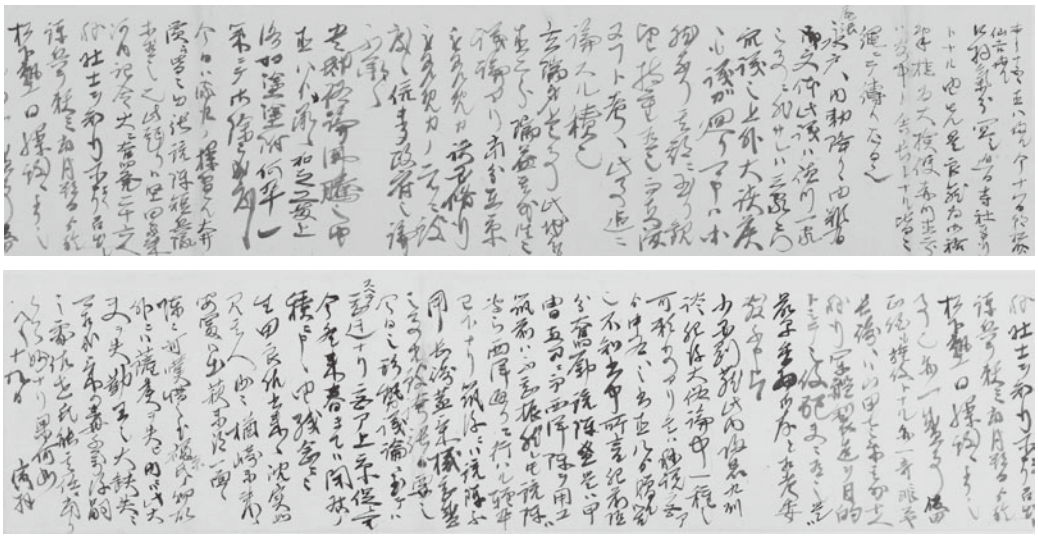
10　吉田松陰書簡　月性宛

安政５年(1858)１月11日
紙本墨書
１幅
23.5×34.0　　熊澤２
(松陰在萩松本、月性在周防国遠崎)(福本義亮氏旧蔵、『全集』(定本版)第６巻３頁／(大衆版)第８巻32頁所収)

安政５年(1858)１月10日付け月性(げっしょう)宛書簡の「追伸」である。『吉田松陰全集』(定本版)では本文と追伸が別扱いであるが、大衆版では一連の書簡として収録されている。

当時の幕政最大の懸案であった日米通商条約の締結をめぐり、松陰は「六十四国は墨になり候とも二国(長門・周防)にて守返し候様仕らでは日頃の慷慨も水の泡と存じ候」と述べている。

松陰は月性と会って議論を交わしたいと願い、同年２月25日、月性は萩で松陰に面会している。



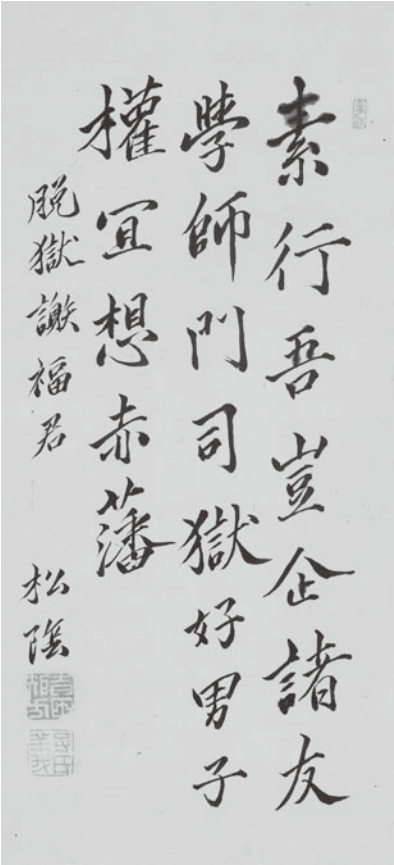
11　吉田松陰書簡

安政５年(1858)８月19日
紙本墨書
1巻
15.0×112.0　　熊澤3
(松陰在萩、宛不明(高杉か土屋か)(松浦松洞・吉田栄太郎宛、品川弥二郎代筆＝『全集』(定本版)第６巻79頁／(大衆版)第８巻92頁所収の原本)

安政５年(1858)８月19日付け松浦松洞(しょうどう)・吉田栄太郎宛書簡(大半は品川弥二郎代筆)の原本と見られる。松陰は、同書簡の末尾に「右ハ餘り多事ニ付、京へ遣候書ヲ弥二ニ写サセ候也、いつれ跡の飛脚ニ委細可申遣候也」と記している。内容は、松陰や藩要路、塾生らの近況と動静を報告したもの。ただし、本書簡にある「玄瑞身上之事」のくだりは、品川代筆本には見られない。

本書簡は、楫取素彦(かとりもとひこ)の「序」と共に１巻に仕立てられ、磯村音介覚書1通・楫取素彦書簡1通が付属している。同「序」によれば、当時、楫取の手元には多数の松陰書簡があったが、人々の求めに応じて分け与えたため、残り僅かになっていたという。そのような中で、明治40年(1907)初夏、群馬県出身の実業家磯村音介(1867-1934)が、楫取から入手したのが本書簡である。

ただし、この書簡には宛名が無く、楫取も「序」で不明と記している。その後、明治44年(1911)３月30日、磯村は、東京青山の楫取の寓居を訪ね、書簡の人物や内容について教えを乞うた。楫取は、磯村宛書簡で、宛名は分からないが、高杉晋作または土屋矢之助共か、と記している。



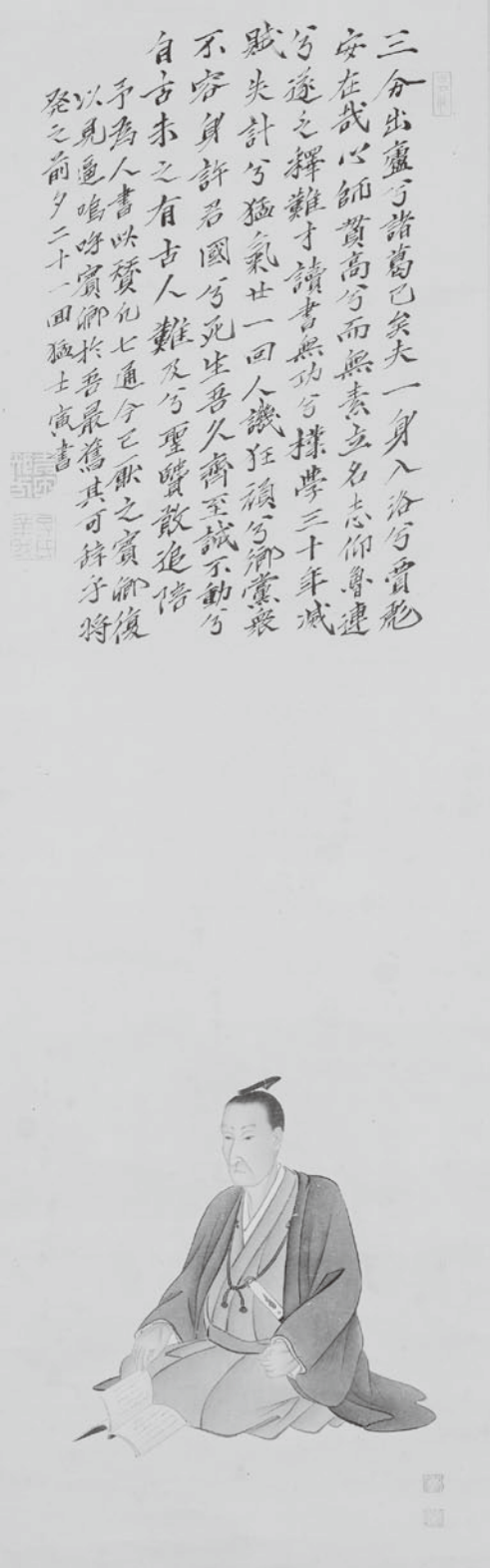
（印）
素行吾豈企、諸友学師門、司獄好男子、権宜想赤藩
脱獄謝福君　　松陰（印）（印）

12　吉田松陰詩書　贈福川犀之助

安政６年（1859）５月24日
紙本墨書
１幅
63.5×29.5　　熊澤４
（松陰在萩、福川在萩）（『全集』（定本版）第７巻517頁「東行前日記」／（大衆版）第９巻569頁「同」、福本義亮著『註訓吉田松陰詩歌集』89頁（平成２、マツノ書店復刻）所収）

安政６年（1859）５月24日、江戸護送を翌日に控えた松陰は、野山獄の司獄・福川犀之助（ふくがわさいのすけ）（1834-85）の独断で出獄を許され、杉家の家族達と決別することが出来た。本書は、松陰がこの福川の厚遇に感謝して贈った詩幅である。松陰より４歳年下の福川は、松陰の人物を崇拝し、外部と書信を交わすことを黙認するなど多くの便宜を図っていた。

ちなみに、松陰は、別れに際して肖像の自賛を書き贈っている（「吉田松陰自賛（福川本）」、萩博物館蔵）。松陰が、家族・門下生以外に自賛を書き与えた人物は、福川ただ一人である。



13　吉田松陰自賛肖像（中谷本）

安政６年(1859)５月24日
紙本着色
１幅
116.7×37.0　熊澤5
(松陰在萩、中谷在萩)(賛＝『全集』(定本版)第7 巻506頁「東行前日記」5月16日条／(大衆版)第9 巻569頁「同」所収)

吉田松陰自賛肖像は、安政６年(1859)５月、江戸護送の幕命を受けた松陰が、旅立つ前に、吉田家・杉家と門下生の品川弥二郎・久坂玄瑞・岡部富太郎・中谷正亮の４名に、形見として与えたものである。本図は、このうち、中谷正亮(1831-62)に与えた１幅。

自賛肖像の作成を発案したのは久坂玄瑞、肖像の筆者は門下生・松浦松洞(亀太郎、1837-62)、松陰の自賛は小田村伊之助(楫取素彦、1829-1912)の依頼によるものであった。

松陰の自賛肖像は６幅作成され、そのすべてが遺っている。完成順は、吉田家本・杉家本が最初で、この中谷本が最後である。

中谷本の作成経緯は、松陰が本図の跋に記している。松陰は、すでに「自賛」を７幅書いており、もう十分と思っていたが、旧知の中谷の懇願に応じた。時あたかも松陰が江戸へ旅立つ前日の夕方であった。

羽織を纏い、脇差を差して正座し、右手で書物を捲る姿を描く。この構図は、中谷本・杉家本・品川本に共通している。

肖像の右下に筆者・松浦松洞の落款(「松洞」、「聴鶴」)がある。自賛肖像の中で、松洞の落款があるのは、本図のみである。

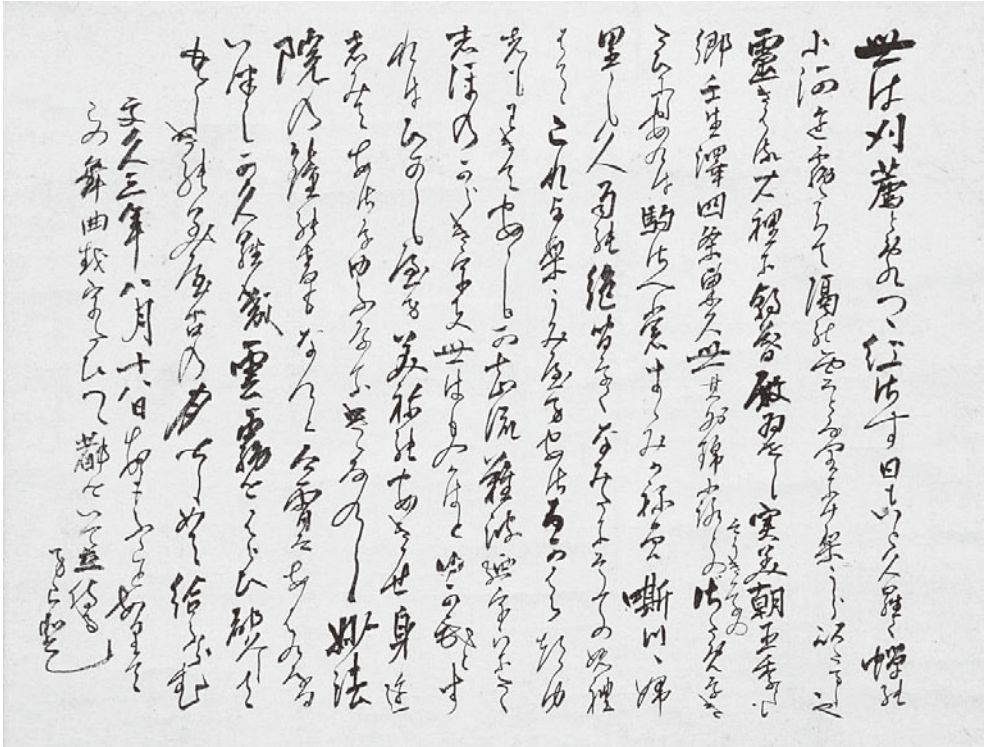
肖像部分

14　久坂玄瑞肖像

紙焼写真
1枚
15.5×11.2　822-11

松下村塾の双璧として知られる久坂玄瑞(1840-64)の写真は存在せず、本図は、久坂の遺児秀次郎の肖像をモデルにしたという肖像画である。福本義亮編『松下村塾の偉人 久坂玄瑞』(誠文堂、1934、マツノ書店復刻、1978)の口絵に掲載されたもの。出典は『日本百傑伝』とするが確認できず、原図も所在不明である。福本氏は、秀次郎に経済的援助をして、久坂家関係文書を譲り受けていたといい(田中助一「福本義亮さんをしのぶ」(『久坂玄瑞全集』収録、マツノ書店、1978))、何某かの事情が存在するかもしれない。

当館所蔵の写真は、昭和9年(1934)9月、山口県立教育博物館が、山口市・防長写真館で撮影(接写)したものである。同教育博物館恵藤一郎主事が、本図にまつわる興味深い情報を、写真台紙に記している。これによれば、昭和16年(1941)7月、恵藤主事が松陰神社へ資料調査に伺った際、総代河村要一氏から、故安藤紀一(あんどうきいち)氏が松陰門下生であった渡邊嵩蔵(わたなべこうぞう)氏(1843-1939)に真偽を確かめたところ、久坂玄瑞ではないと断定された旨の伝聞を得たという。一方、渡邊は上記の福本編著に「題言」を載せており、この肖像画の存在と全く無縁でもなかろう。成立事情はさておき、本図は、久坂の容姿を伝える唯一の肖像画として流布しているものである。

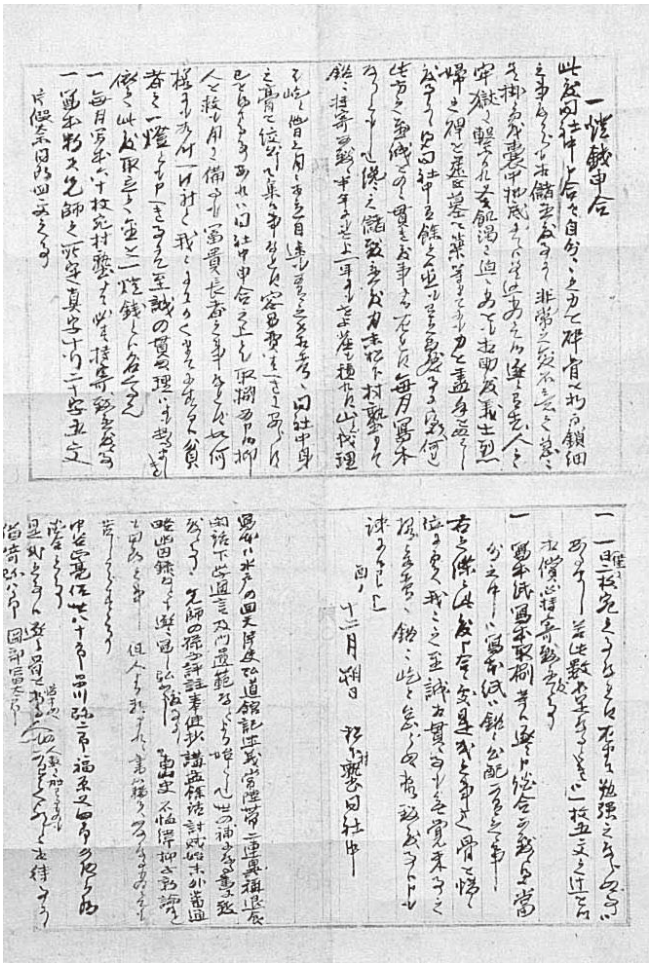


15　七卿落今様歌

久坂玄瑞
文久3年(1863)
紙本墨書
1幅
41.8×55.0　　福本7

文久３年(1863)年８月18日の政変により、長州藩は御所の警備を解かれ、尊王攘夷派の三条実美ら7人の公卿は失脚し、京都を追放された。この七卿落ちの随行者であった久坂玄瑞が、その時の情景を歌った今様(いまよう)歌(七五調の歌)である。

「ふりしく雨の絶間なく　なみたにそてのぬれはてて」という哀感に満ちた一節で知られるこの歌は、司馬遼太郎の小説『竜馬がゆく』の七卿落ちの場面にも登場している。

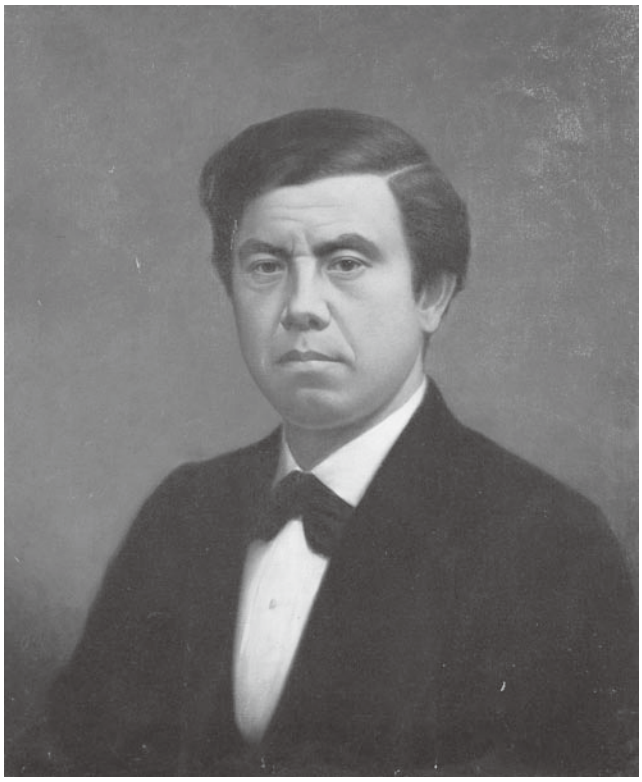


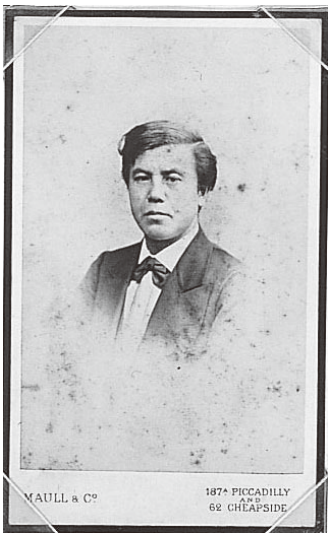
16　一燈銭申合

久坂玄瑞
文久元年(1861)12月
紙本墨書
1幅
25.0×17.5　　福本8

松陰の没後、久坂玄瑞は、塾生の結束を深めるとともに、義挙の資金を得るため、塾生の写本料による積み立てを計画した。命名は、富貴長者に対する「貧者の一燈」に因ったもの。

本書は、その趣意書の部分で、毎月写本60枚ずつを持ち寄ることなどを定めた。これしきのことで骨を惜しむようでは、至誠貫徹はとうてい覚束ないと鼓舞した。



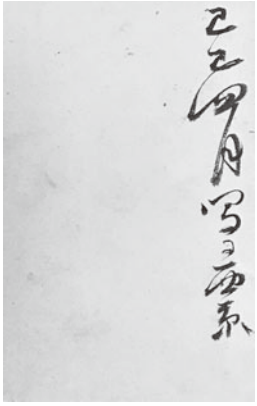


木戸51－6

17　木戸孝允肖像

明治時代
油彩　カンバス
1面
61.0×51.0　　木戸80

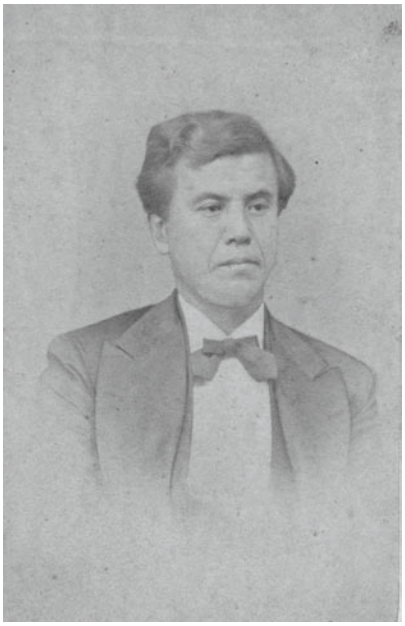
洋装の木戸孝允(1833-77)肖像。明治5年(1872)、木戸が岩倉使節団としてロンドン滞在中に撮影した写真(図版右上)をもとに描いた作品と思われる。作者不詳だが、英国の画家によるものか。木戸家伝来品。

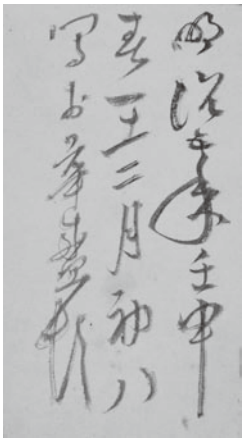


18　木戸孝允写真

明治２年(1869) ４月
鶏卵紙
１枚
10.0×6.3　木戸51-1

京都で撮影。裏面に「己巳四月写す西京」と記される。『木戸孝允日記』明治２年４月22日条の「晴十一字木梨瀧二氏と寺町写真に至る」に該当するものであろう。木戸家伝来品。

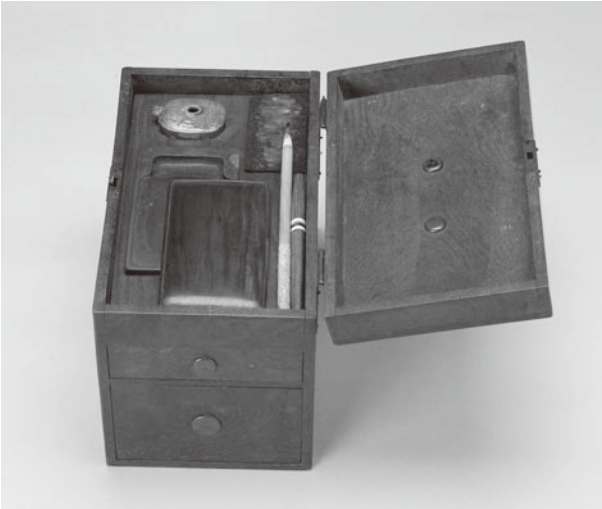




19　木戸孝允写真

明治５年(1872)閏２月８日
鶏卵紙
１枚
10.6×6.3　木戸51-9

岩倉使節団として訪米中にワシントンで撮影。裏面に「明治五年壬申春閏二月初八、写於華盛頓」と記される。木戸家伝来品。



20　木戸孝允所用硯・硯箱

江戸時代後期-明治時代初期
1面・1具
箱22.5×27.0×17.5　　木戸72

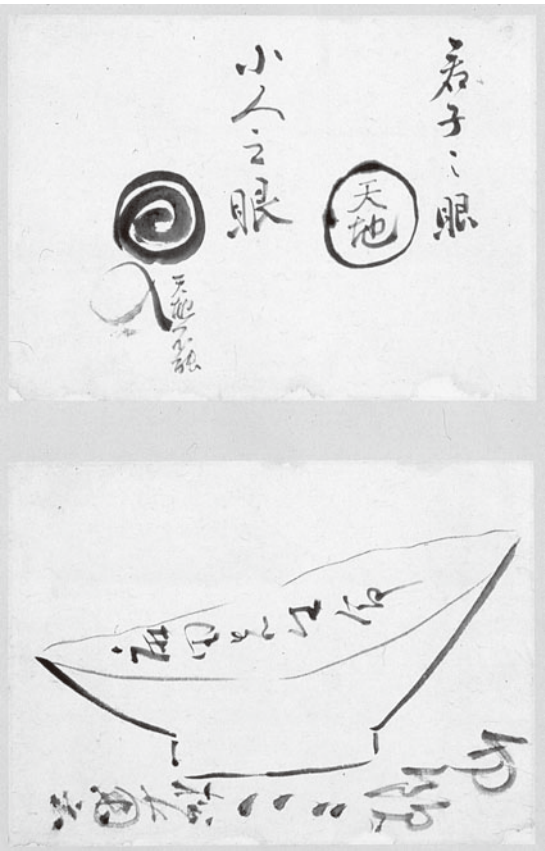
木戸愛用品の一つ。木戸家伝来品。この他、木戸家資料には携帯用硯1面がある。

21　木戸孝允扇面和歌

文久年間(1861-64)
紙本墨書
1面
21.0×40.0　　木戸38

「敷嶋のやまとごころの花をしも　すてて戎しの世にならへとは」

木戸孝允が、攘夷と開国に揺れる世情を詠んだものか。木戸家伝来品。



22　木戸孝允戯画

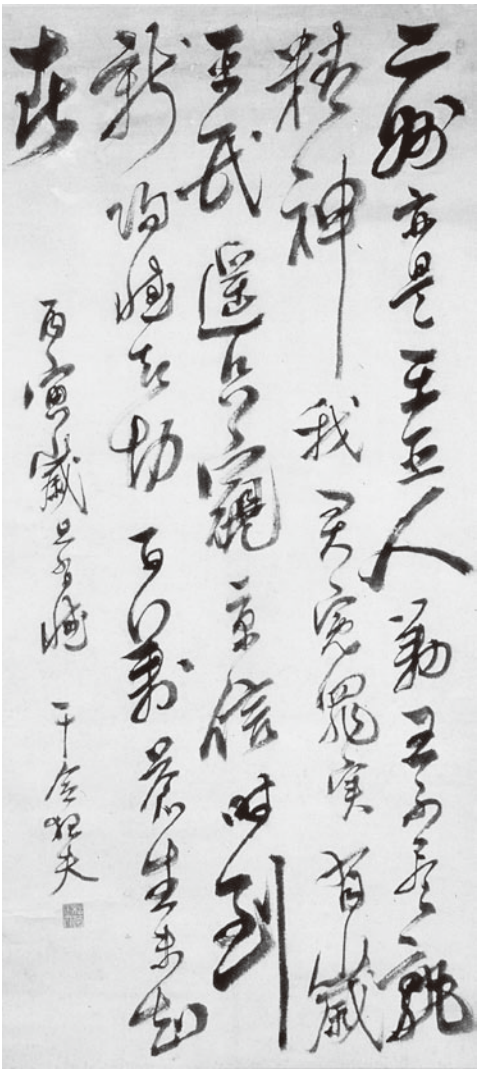
文久２年－元治元年(1862-64)頃
紙本墨画
１幅
165.5×58.5　　周布1-59

木戸(桂小五郎)が、酒が過ぎる年長の周布政之助(すふまさのすけ)を、戯画で気遣ったもの。

周布は、酒がもとで多くの舌禍事件を起こし、処分を受けることもしばしばであった。天地がはっきりした君子の眼に対して、小人は眼が回って「天地不能」とし、酒と命を秤に掛けて「飲む勿(なか)れ飲む勿れ」と記している。

木戸の気持ちが分かっていた周布は、贈られたこの戯画を捨てずに取っておいたのであろう。周布と木戸の交流を示す一品である。

「麻田公輔(あさだこうすけ)」は周布の変名、「松菊(しょうぎく)」は木戸の号。周布家伝来品。

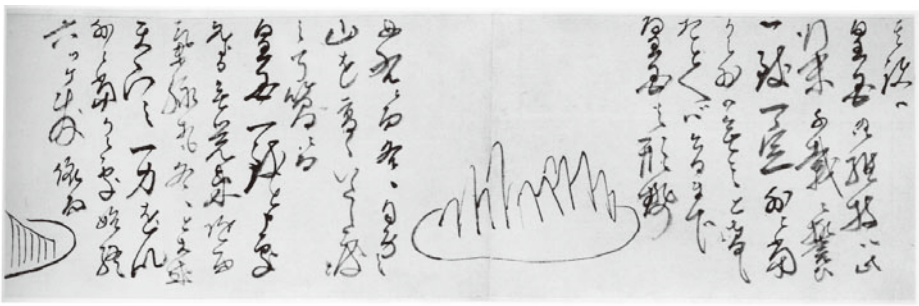


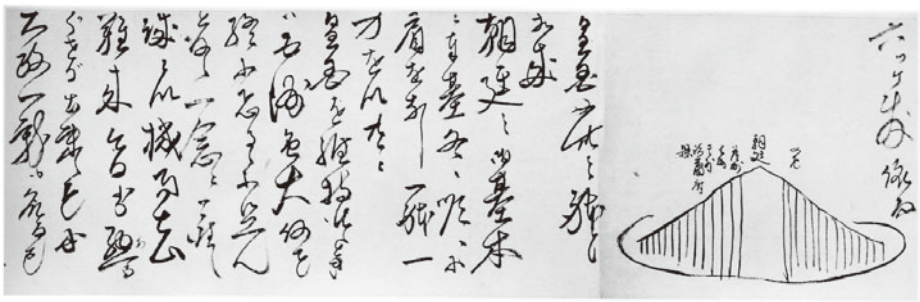
（印）
二州亦是王臣人　勤王不尽就精神　我君冤罪実有歳　臣民遥只窺京信
時到新陽憾却功　百万蒼生未知春
丙寅歳旦有憾　　干令狂夫（印）

23　木戸孝允詩書

慶応２年（1866）１月
紙本墨書
１幅
122.6×56.9　　木戸６

防長二州（長州藩）は王臣として勤王の精神を尽くしており、藩主の冤罪が晴れる知らせが京都から届く日を待ち望んでいるとの意で、禁門の変後、朝敵の汚名を受けた長州藩の無念を詠んだもの。「干令」は木戸の号。木戸家伝来品。





24　木戸孝允書簡　野村素介宛

明治元年(1868)10月15日
紙本墨書
1巻
16.2×712.5　　木戸27

明治元年(慶応4年)2月3日、木戸孝允は、新政府の三条実美と岩倉具視に版籍奉還を建言した。この時は、1月の鳥羽・伏見の戦いの直後であり、時期尚早として取り上げられることはなかった。そこで木戸は、藩主毛利敬親に建言し、薩摩の大久保利通と図って秘密裏に事を進めるよう指示を受けた。

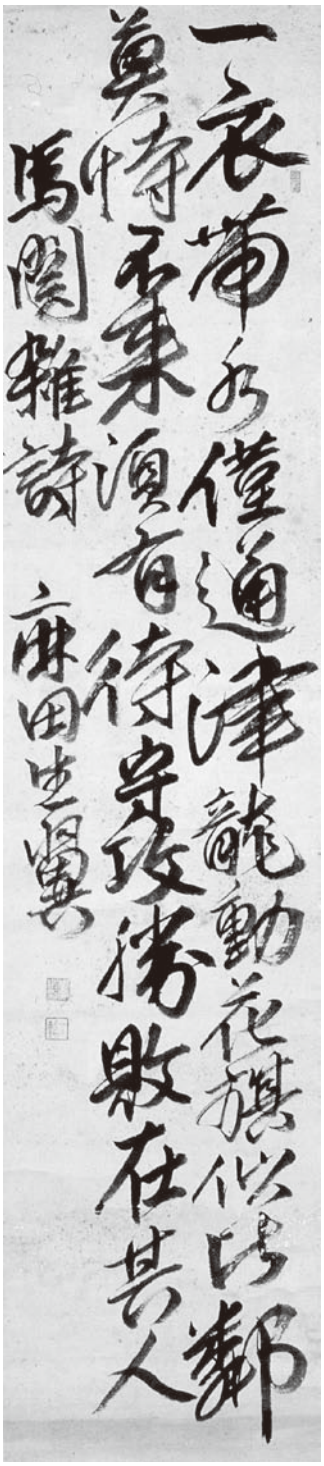
10月15日、木戸は、山口藩(長州藩)の野村素介(もとすけ)(1842-1928)に宛て、自身の国家構想を図示した書簡を認めた。図には、全体を一つの山にとらえ、朝廷を頂点として、薩州・長州・其外諸藩府県が順に肩を並べ列強に対峙する構図を描き、一体一力を以て日本を維持することの重要性を強調した。

木戸松子・高杉東一写真
木戸56-13

25　日本名女咄　幾松木戸公を救うの図

楊洲周延
明治時代
錦絵
1枚
36.5×24.0　　920-54

木戸孝允(桂小五郎)が、京都で国事に奔走していた頃、芸妓幾松が木戸の窮地を救い、のちに木戸の正妻となったことを描いたもの。木戸松子(1843-86)は、京都三本木の芸妓。元治元年(1864)、池田屋事件や禁門の変後幕府に追われる身となった木戸を救い、出石(いずし)(兵庫県)潜伏時代を助けた。維新後、木戸と結婚。明治10年(1877)、木戸の病死後に剃髪し、京都で墓を護った。墓所は、京都霊山(りょうぜん)の木戸の墓の北隣にある。



（印）
一衣帶水僅通津　龍動花旗似比隣
莫恃不来須有待　守攻勝敗在其人
馬関雑詩　麻田生翼（印）（印）

周布政之助写真（文久２年、個人蔵）

26　周布政之助詩書

文久元年（1861）４月
紙本墨書
１幅
129.4×29.6　　周布1-14

周布政之助（1823-64）は長州藩大組士。名は兼翼、字は公輔、号は観山。のちに麻田公輔と改名。村田清風（1783-1855）の薫陶を受けて藩政改革に取り組み、保守派と政争を繰り広げたのちに実権を握った。松陰や高杉ほか門下生のよき理解者で、伊藤博文らの密航留学（長州ファイブ）にも尽力した。

激動の時局に対応する中、文久３年（1863）８月18日の政変、元治元年（1864）の禁門の変（蛤御門の変）、第1次長州出兵と相次ぐ情勢悪化によって追い込まれ、寓居先の山口・吉富家で自刃した。

本書は、文久元年（1861）４月、下関地方に海防視察に出かけた際の詩。周布家伝来資料。

27　ガラス杯

江戸時代　19世紀
1対
高17.8　径5.6　　周布3-23

周布政之助所用のガラス杯。洋酒も嗜んだ愛飲家・周布の姿が想起される。周布家伝来品。

周布政之助(左)・長野昌英写真

28　萩焼河豚型徳利

江戸時代　19世紀
1口
高12.0　径13.5　周布3-50

河豚のひれを配した萩焼の徳利。文久2年(1862)、長州藩京都御屋敷で長州藩医長野昌英と撮影した写真(図版右上、ガラス、アンブロタイプ、個人蔵)に、徳利と杯を手にした周布の姿が見える。この徳利も愛用品の一つであろう。周布家伝来品。

常設展・展示風景

29　陣羽織・袴

江戸時代　19世紀
各１領
裄21.0　身丈95.0　紐下71.0　　周布3-54(12)

周布家の家紋「二重亀甲に久の字」を配した陣羽織と袴。政之助着用。周布家伝来品。

30　河上弥市肖像

沢宣嘉画・賛／昭和10年赤沢松琴模写
紙本着色
1幅
111.7×39.8　　226－16

河上弥市(1843-63)は長州藩士。名は繁義、正義。通称は松之助、弥一郎。変名は南八郎。

文久3年(1863)6月、高杉晋作の組織した奇兵隊の2代目総督となる。同年10月、筑前(福岡県)の浪士平野国臣らと攘夷派の公家沢宣嘉を擁して但馬(兵庫県)の生野で挙兵したが、敗走して自刃。享年21歳。

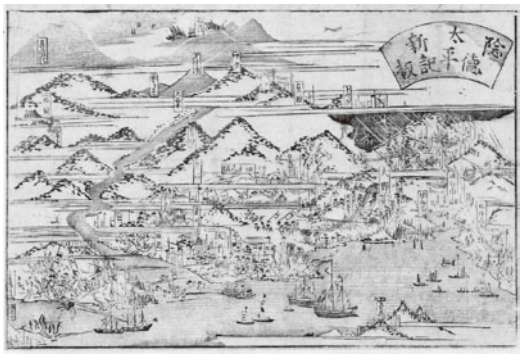
31　来島又兵衛肖像

金戴筆
毛利親直賛
元治元年(1864)冬
絹本着色
1幅
114.0×55.5　　226-10

来島又兵衛(1817-64)は、長門国厚狭郡西高泊村(山陽小野田市)に無給通喜多村政倫の次男に生まれ、のち大組来島家を継いだ。幼名は亀之進、諱は政久。馬関総奉行手元役など藩の要職を歴任した。高杉の奇兵隊結成に呼応し、遊撃隊を組織し総督となる。8月18日の政変後、長州藩の失地回復を目指し、出兵を激烈に主張。禁門の変で激戦を繰り広げたが、敗れて自刃。

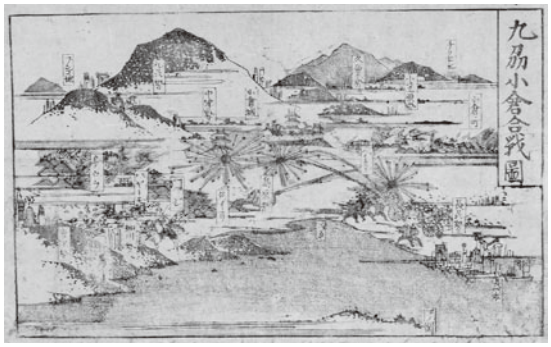
画は、四条円山派の絵師で、幕末に防府方面で活動していた金戴。賛は、遊撃隊総督を務め、幕長戦争(芸州口)に出征した吉敷毛利14代毛利親直(直賢)。

①



②

③



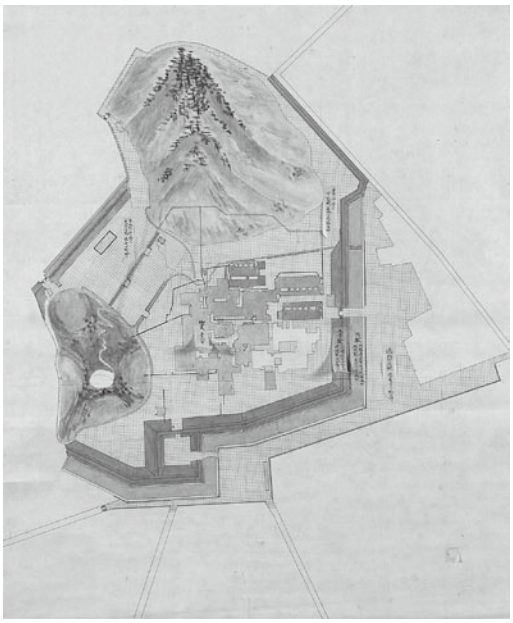
④

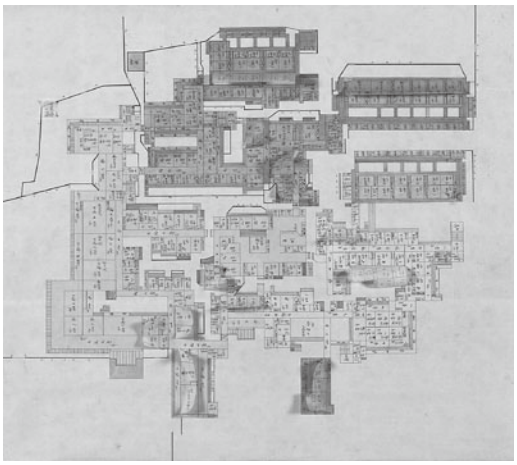
32　四境戦争図

①大島ぐんの図会　②陰徳太平記新板
③石州口周布之合戦　④九州小倉合戦図

慶応2年(1866)
版画
4枚
①28.0×42.5　②28.5×44.0　③29.5×42.5　④28.5×43.0　610-3

慶応２年(1866)６月７日、幕府軍艦が長州藩領の熊毛半島先端と周防大島を砲撃し、幕長戦争(四境戦争)が開戦した。本図は、戦闘の模様を幕府側の視点で描いたもの。①は、大島口の戦いで、幕府軍艦４隻が周防大島の久賀村を砲撃する図。②は、芸州口(広島県)の戦いを描いたもので、題名は、享保２年(1717)に岩国領家老香川正矩が編纂した軍記物「陰徳太平記」になぞらえている。③は、石州口(島根県)の戦いにおける、周布(浜田市)付近の戦闘を描く。④は、小倉口(北九州市)の戦いで、小倉藩を長州勢が関門海峡を挟んで攻撃する模様を描く。





33　山口御屋形図

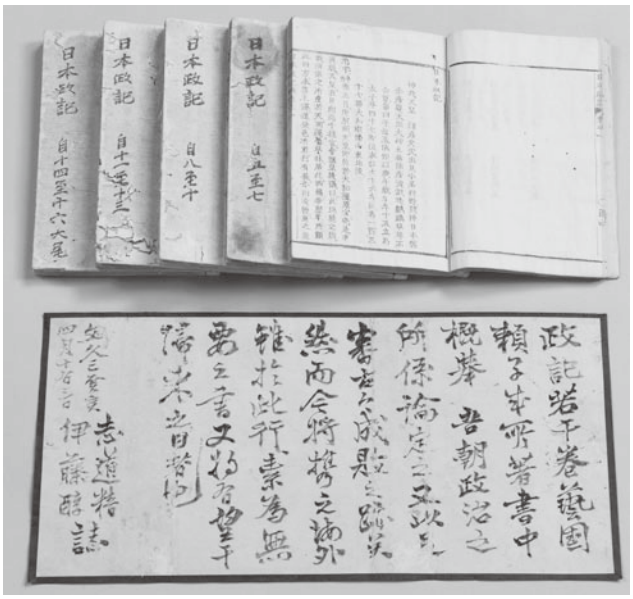
元治元年(1864)頃
紙本着色
2幅
①93.0×79.0　②79.0×102.0　540-17･18

元治元年(1864)10月、山口藩(長州藩)の新たな居城となる山口御屋形(山口城)が竣工した。その後、第1次長州征討の降伏条件として、幕府により一端破却されたが、慶応2年(1866)5月に再竣工した。本図は、当初の造営に係る、①敷地平面図(図版左)と②建物平面図(同右)である。

背後の香山(こうざん)と一露山(いちろざん)を天然の要害とし、東と南に堀と土塁を巡らし、正面に表門と大規模な枡形を築いた西洋式城郭であった。建物差図には、各部屋の名称や間取り、役職の配置が記され、機能別に色分けされている。建物の左下半分が、玄関・式台・大広間・大書院などのいわゆる「表」部分。中央が台所周りで、右上半分が「裏」(奥)になっている。

維新後、敷地は山口県庁に引き継がれ、現在も当時の堀や土塁、石垣の一部、旧山口藩庁門などの遺構がある。

本図は、昭和11年(1936)11月、山口県立教育博物館が、皇政復古70年記念事業に関し、毛利家から寄贈を受けて表装したもの。副本もしくは模写とみられ、原図は、山口県文書館蔵(毛利家文庫58絵図545・546)。



政記若干卷芸国
頼子成所著書中
概挙吾朝政治之
所係論定之又以是
審古今成敗之跡矣
然而今将携之海外
雖於此行素為無
要之書又将有望于
帰来之日者也
文久三癸亥　志道　精
四月十有三日　伊藤　醇　誌

伊藤博文写真　木戸64

井上馨写真　木戸65

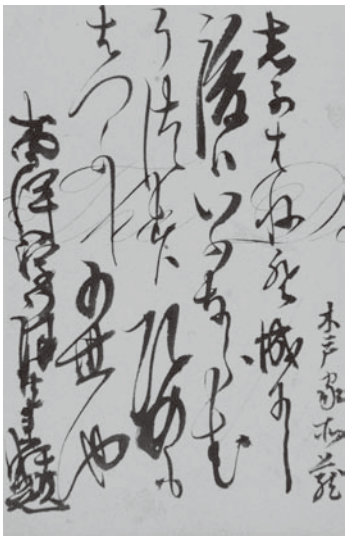
34　日本政記

頼山陽
弘化２年（1845）
16巻・５冊
各17.0×11.8　帙16.5×35.3　　521-113

文久３年（1863）４月13日、伊藤博文は、京都で井上馨（志道聞多）と英国密航の手順を打ち合わせた際、愛読書の『日本政記』を取り出し、帙の裏側に、洋行の決意と抱負を記し、２人が署名した。

頼山陽著　『日本政記』は、神武天皇から後陽成天皇にいたる編年体の歴史書で、同著　『日本外史』とともに、勤王の志士をはじめ、社会に与えた影響は大きかった。

帙裏の署名に見える宍道精は井上馨、伊藤醇は伊藤博文の変名。



35　山県有朋写真

内田九一撮影
慶応３年(1867)５月18日
鶏卵紙　１枚
9.3×6.0　　木戸66

山県有朋(1838-1922)は萩出身。父は長州藩中間(ちゅうげん)山県有稔。通称は小助、狂介。号は素狂(そきょう)、含雪。21歳で松下村塾に入門し、攘夷運動に奔走。奇兵隊軍監となる。四国連合艦隊と交戦し、幕長戦争では小倉口に戦うなど軍事面で活躍した。

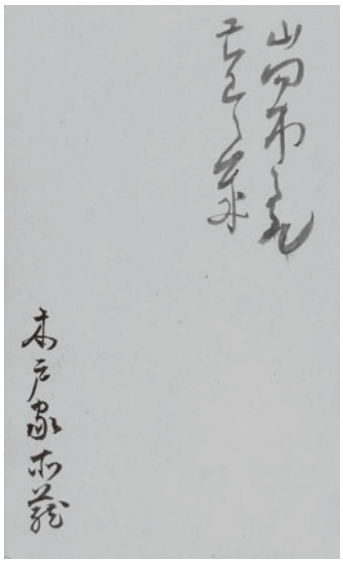
本写真は、大阪心斎橋筋で撮影したもの。裏面に、その際に詠んだ和歌 「しかはねと成にし後はいかならむ　うつす姿もはつかしの世(身)や」(『葉桜日記』所収)の自署がある。木戸家伝来品。

36　山尾庸三写真

丸木利陽撮影
明治時代
1 枚
27.6×21.2　　木戸68

山尾庸三(1837-1917)は、吉敷郡二島村(山口市秋穂二島)出身。長州藩寄組繁沢氏の給庄屋山尾忠治郎の二男。繁沢氏の陪臣を経て、文久3年(1863)藩士に列し、伊藤博文・井上馨・野村弥吉(井上勝)・遠藤謹助と共に英国へ密航留学し(長州ファイブ)、造船技術など工学を学んだ。

明治元年(1868)に帰国後は、明治政府に出仕し、工部省の設立に携わり、工部大輔、工部卿など工学関連の要職を歴任した。明治4年(1871)、工学寮(工部大学校、のちの東京大学工学部)を創立。明治20年(1887年)子爵。木戸家伝来品。



37　山田顕義写真

上野彦馬撮影
明治２年(1869)
鶏卵紙
１枚
10.5×6.3　　木戸67

山田顕義(1844-92)は萩出身。父は長州藩士山田顕行。通称は市之允、号は空斎、韓峯山人。大伯父に藩の財政再建に取り組んだ村田清風、伯父に松陰の兵学師匠山田亦助がいる。14歳で松下村塾に入塾。尊攘運動に奔走。狙撃隊隊長、御楯隊司令として活躍。戊辰戦争では司令として各地を転戦し、五稜郭を陥落。維新後は、陸軍や法律の近代化に尽力した。日本法律学校(のちの日本大学)・國學院(のちの國學院大學)の創設者として知られる。

写真の裏面に「山田市之允　己巳之歳」と記される。木戸家伝来品。

38 広沢真臣写真

内田九一撮影
鶏卵紙
1枚
9.2×5.9　　近藤26-7

広沢真臣（1834-71）は、萩長州藩士柏村家に生まれ、波多野家の養子となり波多野金吾と称した。政務役として藩政に参画、藩命により広沢兵助と改名。幕長戦争の講和条約交渉にあたる。明治政府では民部大輔、参議などの要職を努めたが、明治4年（1871）1月、東京で暗殺された。『広沢真臣日記』（日本史籍協会、1931）は、木戸日記などと並ぶ幕末維新史料として知られる。

39　毛理嶋山官軍大勝利之図

照皇斎国広
明治初年頃
錦絵
6枚続
36.0×146.0　　920-2

慶応4年（明治元、1868）鳥羽・伏見の戦いで、淀城から大阪城にかけての兵火の中で、錦旗を掲げた官軍が勝利する模様を描いたもの。画面右、馬上の人物は征討大将軍仁和寺宮嘉彰親王で、表題の「毛理嶋山」は、毛理＝毛利・長州藩、嶋＝島津・薩摩藩、山＝山内・土佐藩を意味している。

前原一誠写真　木戸62

40　明治小吏年間紀事 宇龍港ニテ賊魁捕縛之図

月岡芳年
明治９年11月22日
錦絵
3枚続
37.0×75.0　　920-30

松陰門下生・前原一誠(1834-76)は、長州藩士佐世彦七の子に生まれ、前原氏を継いだ。14歳で入門し、松陰は 「誠実さ人に過る」と高く評価した。明治政府では参議、兵部大輔などの要職に就くが、官を辞して萩に帰った。

明治９年(1876)10月28日、奥平謙輔らと不平士族を集めて 「萩の乱」を起こしたが、11月５日、宇龍港(島根県出雲市)で捕縛され、翌月処刑された。

本図は、前原、奥平らが宇龍港海岸に上陸したところを警吏が捕らえに向かう場面を想像で描き、いち早く東京で開板して売り出されたもの。

なお、松陰の叔父玉木文之進は、前原ほか多くの塾生が事件に関与した責任を感じ切腹した。